

探索之勞、後世有誰亦舉之於口、何不發行曩之銅鑄、以展喜眉、偶薩人贈其封內神代三陵圖、仍併增修斯書、以弘四方、其愚考與戶田氏進奏本異說者、宜速改之、但以抱痾累月、懶事筆硯、姑存其舊、覽者幸勿怪諸、世稱宇都宮侯之偉効顯績、鎌府以來未見其比也、實非溢美矣、嗟也、余輩賤陋、菲賢、亦何幸遭遇今日之盛典、追憶今古、盛喜罔已、重誌其由、乎簡左、永矢弗諼、時慶應二年丙寅之春、津久井清影跋、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年閏八月廿九日、戶田越前守山陵ノ修補ヲ請フ、建白並指令、

此度御國政の儀、不憚忌諱、申上候様厚く被仰出、難有次第奉存候間、謹て言上仕候、○中當今の急務は、士氣振氣仕候儀第一と奉存候、其士氣振起仕候には、反始報本より人情を厚し、忠孝を養ひ立候事、眞に強國の基と奉存候、彼血氣の小勇より起り候強は、粗暴の所業にも至り、眞の強國とは相成申間敷候、右反始報本は、祖先を不遺始本より大切に存候、實情の厚より溢出る忠孝の勇を振立候、士氣盛強國の根元實滿と奉存候、此忠孝の大節を天下に示され、天朝御代々様の御陵多分荒廢相成居候、此儀古來有志の者、憂傷仕候段兼々承知仕候、乍恐萬乘御遺體を被爲納候處、荒蕪の儘にて被差置候儀、誠無勿體儀、恐懼悲傷仕候事に御座候、臣子の分にては一儀安心難仕儀と奉存候、誠に今般從天朝御縁組被爲遊候上は、猶更御陵御修補の儀御執行被遊候様奉存候、右様相成候ば、乍恐今上皇帝には、巨遠莫大の御孝道に相成、於御當家は、廣大の御忠節相立、官武御一和の御趣意、彌以相顯れ、且官武御一同に、忠節の道を以て御垂教被遊候へば、海内一般御徳化に浴し、反始報本の情厚く、眞の忠孝の士氣振起可仕、且御陵御修復の事、鎌倉以來數百年來絶て無御座候處、御當家に至り御修補相成候へば、千萬年不朽の御盛功にて、御忠義の道相立候て、天朝の御氣色に被爲叶、天下の人民一統感戴仕り、武威も無限に相輝き可申と奉存候、依之御陵御修補の儀ハ、御強國の基、則天下無雙の一大成の事と奉存候間、追て御上洛前に、御修補の儀も